

## 見 果 て ん 夢

— ウィラ・キャザーの「魔法の断崖」について —

大 野 充 彦

## The Unfinished Dream: On Willa Cather's "The Enchanted Bluff"

Mitsuhiko OHNO

## 1

アメリカの著名な女性小説家、ウィラ・キャザー (Willa Cather, 1873-1947) の短編小説、「魔法の断崖」("The Enchanted Bluff," 1909) は、六人の仲良しの少年たちの共通の《夢》／および、彼らが大人になってからも抱き続けている、その《夢》への強い愛着、を彼らの一員である「わたし」の目を通して、詩情豊かに描いてみせた、味わい深い作品である。

正味12ページ余りのこの小編は、その横溢する叙情性に無心に酔い痴れるだけでも、心が洗われるような名品ではあるが、素面に返っていきさか理屈っぽく考えてみたい点も、幾つかないわけではない。そして、そうすることが、この短編の世界を少しでもより深く理解することに、つながるかもしれない。

そこで、筆者がこの小品を読んで気づいた若干の疑問点——少年たちの《夢》の〈本質〉は、何か／彼らの《夢》が、〈滅び〉・〈終わり〉といった想念と密接に結びついているのは、なぜか／彼らが、成人後も少年時代の《夢》に執着し続けるのは、なぜか／そして、それほどこの《夢》を大切にしている彼らが、いつまでもその実現に乗り出そうとしないのは、なぜか、の四点——を中心に、以下、筆者なりの考察を、試みに加えてみようと思う。

## 2

アメリカはネブラスカ州、サンドタウン (Sandtown) の町に住む、六人の少年グループの心のふるさとなるのは、彼らが遊び慣れた川中の砂州を核とする、町の近くの大らかな自然である。その豊かさは、作品の冒頭部において、語り手の「わたし」により、20年後の現在から次のように回顧されている——

我々は、日暮れ前に一泳ぎした。そして、我々が、自分たちの夕食をこしらえている間、斜めに差してくる陽光が、我々の周りの白い砂をまぶしく照らした。半透明の赤い日輪自体は、我々が食事を取るために腰を下ろしたとき、とうもろこし畑の褐色の広がりの方こうに沈んだ。すると、川の水と我々の凸凹のない砂州との上に暑苦しくよどんでいた空気の層が、動き始めて、比較的平らな方の川岸にはびこっている矢車草とひまわりの香りを運んできた。川は、ネブラスカのとうもろこし栽培地帯を潤している、六本の流れのうちの他のいずれとも同様に、褐色の緩やかな姿を呈していた。["The Enchanted Bluff," in *Five Stories by Willa Cather* (New York: Vintage, 1956), p. 3]

しかし、川は、絶えずその水路を変え続けていた——

毎年、春になると、増水した流れが、東岸の断崖の下部を削り取ったり、西岸の数エーカーのとうもろこし畑を噛み裂いたりした。そして、渦を巻きながら土砂をさらっては、どこか他の場所の泡立つ泥の州にそれを堆積させた。真夏に水位が低下すると、新たな砂州がこのような現れ、八月の日差しの中で乾燥して白くなった。これらの砂州が、次の出水の激しい勢いをもってしても押し流すことができないほど、強固に形成されることも、時々あった。……

我々が焚き火をしたのは、それが黄緑色に覆われる三度目の夏を迎えた、そういう島の一つにおいてだった。ゆらゆら揺れる柳の細枝の茂みの中ではなく、その年の春に付け足された、細かい砂の平らに盛り上がった段丘の上でだった。それは、波跡で美しく畝を立てたようになった小さな新世界で、あたかも巧妙に保蔵処理されたかのように、すっかり白くなって干からびた亀や魚のちっぽけな骸骨が、散らばっていた。夏の夕方、我々は、しばしばその場所まで泳いでいっては、砂の上に横たわって休んだものだったが、その場所の新鮮な感じを損なわないように、注意を払っていた。[p. 4]

### 3

続いて、「わたし」の仲間たち——グループ最年少で10歳のフリッツ・ハスラー (Fritz Hassler) から、最年長で17歳のアーサー・アダムズ (Arthur Adams) までの五人の少年たち——が、次々に紹介される。

まず、ドイツ系の仕立屋の息子たち、ハスラー兄弟である。12歳のオットー (Otto) は、頭が良く、とりわけ数学を得意とするが、春学期になると、いつも学校を抜け出しては、弟のフリッツと共に川遊びに熱中する癖があった。

丸々と太った、そばかすだらけのパーシー・パウンド (Percy Pound) は、少年文学の熱心な愛読者で、授業中にこっそり推理小説を読み

ふけた罰として、始終居残りを命じられていた。

そばかすと赤毛のために仲間内で道化役を演じさせられている、ティップ・スミス (Tip Smith) は、毎日、学校から帰ると、父親が経営する食料雑貨店を手伝い、骨身を惜しまず働いていた。

アーサー・アダムズは、母とは死別し、父にはあまり構ってもらえない寂しさのなせる業か、世間に対して斜に構えたところがあり、学業に身を入れず、ハイ・スクールの卒業が遅れていた。が、反面、苦労人の思慮深さと思いやり、それに魅力的な笑い声で、仲間たちに人望があった。

これらの少年たちに「わたし」を加えた六人は、主としては川の神秘に惹かれて結ばれた、親密な同志であった——

ほかの少年たちも、来ては去り、魚釣りやスケートをするために川を利用したが、我々六人は、流れの精霊に信義を誓っていた。だから、我々は、主に川を通して結ばれた盟友同士だったのだ。[p. 5]

### 4

さて、その日、夕食を済ませると、少年たちは、川岸の流木を拾い集めて焚き火を始め、その周りに寝転がって夏の夜空を見上げながら、たわいない雑談に興じる。

小北斗七星のこと、北極星のこと、天の川のこと。やがて、赤い月が昇ると、少年たちは、「その昔、赤い月に生けにえを捧げた」と伝えられる、アメリカン・インディアンのアステカ族を連想し、更には、大昔のアメリカン・インディアンで、巨大な盛り土の塚を築いた部族に思いを馳せる。

そして、大なまが川面で跳ねる水音が聞こえると、「昔、この川のどこかに隠された」と言われる伝説の黄金のことが話題となり、更に、この川の上流の源や下流の都市のことへと話題は移り、最後に、各々が、自分の行ってみたい所について話す仕儀となるのである。

このように、少年たちは誠に気紛れで、彼ら

の関心も誠に取り留めがないけれども、彼らの意識の底流を成すものは一つであることを、見逃してはなるまい。それは、至純の〈ロマンティズム〉——つまり、彼らを取り巻く〈現実〉から大きく掛け離れたものに対する、ひた向きの憧憬——である。

小北斗七星 / 北極星 / 天の川 / 遥かないにしえに栄えたアメリカン・インディアンの部族 / 川の黄金伝説 / 各自の憧れの地——どれ一つを採っても、空間的、時間的、もしくは心理的に、少年たちから遠く隔たっていないものはない。

恐らくは、少年期に特有の〈ロマンティズム〉が、“昼間の〈現実〉をすっぱりと覆い隠すような広大な「夜空」”や、“昼間の陽気な仮面をかなぐり捨てて、〈現実〉への不満を露骨に並べ立てるような「川の水」”に影響されて——すなわち、〈現実〉を忘却させる前者の作用と、〈現実〉からの逃避を促す後者の作用とに反応して——一段と高まり、勉強だとか家業だとか家庭の事情だとかいった、ちまちました日常の煩事から、少年たちを解き放って、彼らを自由な〈空想〉の世界へと羽ばたかせたのであろう——

我々は、再び寝転んで、物思いにふけりながら、世界を包んでいる暗い夜空を見上げた。川の水のごぼごぼという音が、一層激しくなっていた。我々は、夜になると、それが反抗的で不平がましい響きを帯びるのに、しばしば気づいていた。その響きは、昼間の機嫌の良い含み笑いとは全然違うもので、よりずっと深くてもっと力強い流れの声のように思われた。[p. 7] (下点〔黒〕は筆者。以下も同様。)

そして、この夜、少年たちのそうした〈ロマンティズム〉に最も強烈に訴えかけ、彼らの心に鮮烈な印象を刻みつけたのが、ティップ・スミスがいつかぜひ行ってみたいと憧れている、「魔法の断崖」(“the Enchanted Bluff”) [pp. 10, 14, 15] の話だったのである。

## 5

ティップ・スミスには、探鉱熱に取りつかれて各地を転々と放浪している、一人のおじがいた。

ティップ・スミスがそのおじから聞いた、不思議な巨岩とその上の住人たちとにまつわる伝説は、概略、次のとおりである。

ニュー・メキシコ州の辺鄙な〈砂漠〉地方のど真ん中に、高さがおよそ900フィートもある巨大な赤い花崗岩が、そそり立っている。その頂上を極めた白人は、これまで誰もいないところから、この巨岩は、その地方では「魔法の断崖」と呼ばれている。

その地方のインディアンたちの言い伝えによれば、何百年も昔のこと、その「断崖」の上にインディアンの村があり、男たちは、木と樹皮で出来た一種のはしごを伝って、地上で狩猟を行い水を汲んでいたが、それ以外には、決して地上と接触を持とうとはしなかった、という。

なぜなら、村人たちは、布を織り陶器を作って暮らしを立てている、平和を愛する部族であり、その「断崖」に移住したのも、戦が絶えない地上から逃避するためだったからである。

だが、所詮は、彼らも、殺戮者たちの非情な魔手を免れおおせることはできなかった。あるとき、男たちが、地上に下りて狩りをしていると、大嵐に見舞われ、「断崖」の頂上に戻るためのはしごが、めちゃめちゃに壊れてしまった。そこへ、北方から勇猛な戦士たちの一隊が現れ、村の老人たちや女たちが「断崖」の上から見守る状況下で、男たちを皆殺しにしたのである。

殺戮者たちは去ったが、「断崖」の上に残された人々は、地上に下りるすべもないまま、全員、餓死して果てる。

以来、一人として、その「断崖」に登った者はいない。勿論、登ろうと試みた者が皆無だったというわけではないが、厳しく切り立った「断崖」は、何人の登攀をもかたくなに拒んできたのである。

## 6

この「魔法の断崖」の話は、少年たちの心を異常に高ぶらせたので、彼らは、なかなか寝つくことができなかった——

我々のうちの何人かは、まどろんでいるようなふりをしていた。けれども、我々は、本当は、ティップの断崖と絶滅した部族のことを考えていたように、わたしには思われるのだ。  
[pp. 12-13] (下線は筆者。以下も同様。)

やがて、パーシーが、暗がりから話しかけた。

「おい、ティップ。君がそこへ行くときには、僕も一緒に連れていってくれるかい？」

「たぶんね。」

「もし僕たちのうちの一人が、君より先にそこへ着いたら、どうする、ティップ？」

「誰であれ、その断崖へ最初にたどり着いた者は、自分が見たことをそのまま仲間たちに伝え、約束しなければならぬ」と、ハスラー兄弟の一人が言い、我々は皆、直ちにこれに同意した。

幾分安心して、わたしは眠りに落ちた。わたしは、断崖への先陣争いの夢を見たに違いない。と言うのは、他の連中がわたしより先を行き、わたしには勝ち目がなくなりかけているのではないかという、一種の不安に駆られて、わたしは目覚めたからである。わたしが上半身を起こすと、衣服がじっとりと湿っていた。他の少年たちに目をやると、彼らは、消えた焚き火の周囲に、ぎこちない姿勢で寝転がっていた。[p. 13]

「わたし」以外の少年たちが「ぎこちない姿勢」で横たわっていたのは、彼らも、「わたし」と同じ「不安」にさいなまれていたからにはかなるまい。

## 7

では、なぜ少年たちは、「魔法の断崖」の話にこれほど心を惹かれたのであろうか。

まず、この話が、遠く離れた土地における、

遠い過去の出来事——恐らく、架空の土地における、架空の出来事なのであろうが——に関する話であることが、少年たちの〈ロマンティズム〉にまっすぐに働きかけたであろうことは、想像に難くない。また、“村の滅亡以後は、「断崖」に登った者は誰一人いない”とされており、「断崖」の頂上は、いわば未知の世界であることが、彼らの〈ロマンティズム〉を一層募らせたのであろう。

けれども、少年たちは、俗世の争い事を忌避し、平和に徹して生きようとした人々の住みかである「断崖」——「周囲何百マイルにもわたって、サボテンと砂漠以外には何もない」[p. 12]が、その真下には「良質の水が湧き、緑草が豊かに生い茂っている」[p. 12]「魔法の断崖」——に、何よりも〈孤高と平和の理想郷〉——つまり、人生の〈オアシス〉——を見ていたのではなからうか。

家業の手伝いに追われているティップ・スミスや、家庭に問題のあるアーサー・アダムズについては言うまでもないが、たぶん、他の少年たちも、それぞれ、彼らなりに人生という〈砂漠〉——否応なく、何らかの意味での闘いを避けることができない、荒涼たる〈砂漠〉——の一端を既に体験しており、それだけに、〈オアシス〉の話には強く心を惹きつけられたのではなからうか。

筆者には、ここら辺りに、少年たちの《夢》の〈本質〉が潜んでいるように思えてならないのである。

## 8

更に、少年たちは、「絶滅した部族」[pp. 13, 15] (前出=本稿第6節第1独立引用文の下線部 / 後出=本稿第9節第2独立引用文の下線部) に対して、彼らの意識の奥底で、深い愛惜の情を覚えてもいたのではなからうか。そして、それは、単に、“不条理な〈滅び〉を強いられた弱者への同情”というだけでなく、“やがては失われていく自分たちの少年時代への惜別の念、に通じる感情”でもあったのではなからうか。

「絶滅した部族」と同様に、自分たちの少年

時代も、一度<sup>ひとたび</sup>〈終わり〉を告げれば、二度とよみがえることはないのである。そうした〈はかなさ〉の予感が、少年たちの気持ちを「魔法の断崖」のかつての住人たちに一層近づけた、とは考えられないであろうか。

少なくとも、「わたし」にとって——比較的気楽だった少年時代と決別して、大人の世界に仲間入りする日を間近に控えていた、当時の「わたし」にとって——、そんな〈はかなさ〉の予感が切実なものだったことは、明らかである——

これは、その年における我々の最後の焚き火だった。そして、わたしがそれを、ほかの年のどの焚き火よりよく覚えていても、不思議ではない理由が、あったのだ。翌週、ほかの少年たちは、サンドタウン・ハイ・スクール (the Sandtown High School) の彼らの古巣に戻っていく予定だったが、わたしは、分水嶺地方に赴任して、ノルウェー人たちの移住地区にある、わたしの最初の田舎の学校で、教師を務めることになっていた。わたしは、いつも一緒に遊んだ少年たちと別れ、川を後に残し、風車ととうもろこし畑と大牧草地とだけから成る、風の強い平原に赴かなければならぬことを考えて、既に郷愁に取りつかれていた。[pp. 4-5] (下点〔白〕は筆者。他所も同様。)

この引用文からも、“「わたし」の心の中で、自分自身の少年時代の〈終わり〉が、「断崖」の住人たちの〈滅び〉と緊密に結びつく、十分な理由があった”と言えるのではなからうか。

加えて、それから6年ないしは7年後のアーサー・アダムズの早過ぎる〈死〉——この作品は、〈滅び〉や〈終わり〉や〈死〉の想念が底流を成している。

そして、正にそれらの想念こそが、20年後の今、「わたし」をティップ・スミス話の回想へと駆り立てる原動力になっているのではあるまいか。すなわち、しかるべき年齢になって、〈滅び〉や〈終わり〉や〈死〉を一層深く実感するようになったことが、それらを超越して厳然と存在し続けるもの——「魔法の断崖」——

への「わたし」の憧憬を、激しく掻き立てるのではあるまいか。

## 9

ともあれ、「魔法の断崖」に対する《夢》を皆で分かち合った年の冬、「わたし」が、クリスマス休暇でサンドタウンに帰省したとき、少年たちは、再び川中の島を訪れ、「断崖」をきっと見つけようとの《夢》を新たにしたのである。

だが、その時から今日まで、六人のうちで「断崖」に登った者は、誰もいない。

カンザス・シティーで株式仲買人を務めるパーシー・パウンドは、仕事が多忙なせいか、それほど遠くに出かける余裕はなさそうである。otto・ハスラーは、鉄道会社に入ったが、ブレーキ操作を誤って片足を失った。そのため、彼と弟のフリッツとは、父親の跡を継いで、故郷サンドタウンの仕立屋に納まった。アーサー・アダムズは、サンドタウンで漫然と青春を過ごし、健康を損ねてわずか24歳で一生を終えた。そして、ティップ・スミスは、だらしない浪費好きな娘と結婚して、家庭に縛られ苦勞するうちに、すっかり老人くさくなってしまった。

要するに、かつての少年たちは、皆、人生の〈現実〉に呑み込まれてしまったわけである。

けれども、アーサー・アダムズは、死期が迫ってからも、「断崖」行きの希望を楽しげに「わたし」に語った——

彼は、ティップ・スミスの断崖<sup>だんげ</sup>のことで冗談を言った。そして、時候がもっと涼しくなり次第、すぐにそこへ出かけるつもりだ、と言いつ切った。[p. 14]

また、ティップ・スミスは、20年後の今でも「断崖」行きを諦めていず、息子のバート (Bert) を連れて「断崖」を訪れる日を楽しみにしている旨、「わたし」に打ち明ける——

この前サンドタウンに戻ったとき、わたしは、ある月の明るい夜遅く、彼が売上金を確かめて彼の店を閉めた後、彼と歩いて家に帰った。我々は、遠回りして、校舎の石段に腰を下ろ

した。そして、あの頃の気分に戻って、例の孤絶した赤い岩と絶滅した部族とにまつわる伝奇的な話に、再び大いに花を咲かせた。ティップは、自分は今でもそこに行くつもりだと、言い張っている。しかし、彼は、息子のパートが彼と一緒にいける年齢になるまで待とうと、今は考えている。パートは、この奇談を既に聞かされており、魔法の断崖のことで頭が一杯になっている。[pp. 14-15]

そして、日々の生活のためにあくせく働いているパーシー・パウンドやハスラー兄弟にしたところで——不自由な体になったオットー・ハスラーでさえも——、「断崖」を探し当てる《夢》を完全に忘れ去ったわけではあるまい。否、彼らとて、この《夢》を大切に作る気持ちは、アーサー・アダムズやティップ・スミスや「わたし」とほとんど変わらないのではなからうか。

## 10

だとすると、かつての六人の少年たちが、それほどまでに、「魔法の断崖」を訪ねる《夢》に執着するのは、なぜか。また、そんなにこの《夢》にこだわり続けている彼らが、いつまでもその実現に乗り出そうとしないのは、なぜか。

彼らが、いつまで経っても、自分たちの《夢》の実現に向けて具体的な行動を起こそうとしないのは、単に、仕事が忙しかったり、身体に障害を抱えていたり、病に冒されていたり、息子が幼過ぎたりするからであろうか。

否、それらは、決して本質的な理由ではあるまい。

まず、「わたし」やそのかつての遊び仲間たちが、自分たちの《夢》に執拗にこだわるのは、恐らく、彼らが人生の過酷な〈現実〉を生きざるをえないからであろう。人生の過酷な〈現実〉を生きざるをえないからこそ、心の〈オアシス〉としてのこの《夢》を、必要としてやまないであろう。そして、その《夢》は、決して〈現実〉にまみれてはならない、神聖な〈心の抛りどころ〉なのである。

だからこそ、彼らは、自分たちの《夢》の実

現を目指してはならないのであろう。なぜなら、なまじそのように努めた揚げ句、仮に、「魔法の断崖」がフィクションにすぎないことが決定的に明らかになりでもすれば、彼らの《夢》は空しく消滅するしかないではないか。逆に、万一「断崖」が実在したとしても、いったん《夢》が実現してしまえば、それはもはや《夢》ではなくなるではないか。

確かに、彼らも、最初には本気で「断崖」登攀を考えていたことであろう。だが、その後、彼らが、実人生の厳しい荒波に揉まれるうちに、彼らの心の中で、「断崖」の持つ意味は、著しい変質を遂げたに違いない。

そう。「魔法の断崖」にいつか行ってみたいという《夢》は、彼らにとっては、永遠に《見果てぬ夢》なのである。ティップ・スミスも、その息子パートも、生涯、決して「断崖」に登ることはあるまい。

けれども、ティップ・スミスの《夢》がパートに受け継がれたように、パートの《夢》も、彼が《見果てぬ》まま、その子々孫々へと伝えられていくことであろう。

なぜなら、荒涼とした人生の〈沙漠〉をなんとか生き抜くためには、心の〈オアシス〉となる《見果てぬ夢》が、何人にも絶対に必要だからである。

そして、正にそのことこそ、作者ウィラ・キャザーが、この珠玉の散文詩のような美しい短編小説を通して、最も訴えたかったことではなからうか。

(本稿の内容は、2000年10月28-29日に鳥取大学で開催された、日本英文学会中国四国支部第53回大会において、筆者が「見果てぬ夢」と題して行った口頭研究発表の内容と、ほぼ同一である。)